

皇帝礼拝とキリスト礼拝

—ヨハネの黙示録の一考察—

小 田 丙 午 郎*

Emperor Worship and Christ Worship in the Revelation of St. John

Heigoro ODA

(1974年9月30日受理)

は じ め

Namen haben ihre Geschicke, aber so sonderbare
wie das Wort "Philosophie." Windelband

哲学という語¹⁾が概念に規定されるまでの過程にもまして、特殊な運命と道程とを辿ったのは旧約と新約とあわせて66巻の聖書である。各時代に、異った地域に個々に分散された断片的文書や書簡などが収集され、討議されて正経(kanon)となるまでの経過は正に「一卷」の書にして余るものがある。旧約聖書は別として、新約聖書の中でヨーロッパのキリスト教会に著しい影響を及ぼしたものはローマ人への手紙とヨハネの黙示録とではなかろうか。アウレリウス・アウグスティヌス(Aurelius Augustinus 354—430)の回心²⁾がローマ人の手紙に負うことは彼の告白するところであり、16世紀の宗教改革はマルティン・ルター(Martin Luther 1483—1546)がこの手紙に聖書の中心的地位を与えたのに端を発したと言っても過言ではない。

一方同じアウグスティヌスの大著神の国の構想に³⁾示唆を与えたのはヨハネの黙示録であるとも言われ、またルターにローマ・カトリック教会の教皇の地位を憤怒させたのはこの書であり、さらに彼と時代を同じにした⁴⁾アルブレヒト・デュラー(Albrecht Durer 1471—1528)がこの書の中から画材を得て、民衆に世界の終末を訴え、改革者の側面援助者となったことはドヴォルシャックの次の言葉に表われている。「かようにして黙示録版画⁵⁾は近代最初の偉大なるドイツ芸術作品であり、同時に純粹なる芸術作品である。ルターの深遠と雄弁とを兼ね備えたリター以前の説教である。」

ローマ人への手紙の発信者パウロ(Paulus)はキリキアのタルソ生れのDiasporaである。彼はギリシア語を話しギリシア的教養を身につけ、キリスト教の根本真理すなわちEuaggelia(福音)を当時のギリシア・ローマ世界の国際語⁶⁾Koinèで書いた。これは散文体である。ヨハネの黙示録もまた書簡である。ヨハネもまたこれを認めるのにギリシア語を用いた。しかし、黙示録の語法と文脈に破格があることは殆どすべての注解者の記すところである。

序に黙示の原語はギリシア語 apokalupsis (Enthüllung, the removing of a cover)。おおいを取除くの意である。この語はローマ人への手紙にも使用されている。では黙示録の題名がヨハネの書簡に冠せられたのは、原語に即した内容のためであろうか。この書簡

* 史学研究室

に題名を付したのは執筆者自身ではない。ヨハネの黙示録の内容と執筆者の真意は何であれ、apokalupsis の意味は1世紀の終わりごろには、ユダヤの Apokalyptik, apocalyptic literature すなわち、日本語訳の黙示¹¹⁾文学の系列に属する文学様式や技巧のそれに限定されるようになった。因に黙示文学とは紀元前2世紀に、ユダヤがギリシア支配下にあった時、民族の抵抗精神と Messiah (救世主) の到来の希望とが錯綜した特殊な類型の文学であり、その代表的なものはダニエルの書¹²⁾である。

ヨハネの黙示録の章句には旧約聖書から引用されたものがある。そしてその数の多い点ではダニエル書は第1位である。黙示文学においては文字は絵画を浴び、現実には幻影に包まれ、表白的なものは隠喩的に表現されている。ヨハネの黙示録もこのような体裁に従っている。これは思弁的論証的なローマ人への手紙の精神的風土には異質である。ヨハネの黙示録に払われた研究労作はローマ人への手紙に対してなされたそれとは別種のものである。

人も知るように、聖書解釈が白熱化したのは宗教改革の時代である。黙示録の解釈はこれ以来、その解釈分野¹³⁾が次の三つに別れるようになった。the Futurist (未来派) the Historical (歴史派) と the Preterist (過去派)、他方黙示録の研究方法については Literalkritische Methode (文献批判方法)、Formgeschichtliche Auslegung (様式史的解釈) と Religionsgeschichtliche Methode (宗教史的方法) などが試みられて来た。

以上筆者はヨハネの黙示録の外郭をローマ人への手紙と対比して述べて来た。以下本文において筆者が意図するものは、ヨハネの黙示録の注解者の論議の焦点を明らかにすることではなく、またこれらの注解に対し神学的な角度から新しい問題を提起することでもない。

ローマ史、いな、世界史はローマ帝国のキリスト教迫害の記事には長い頁を配当している。筆者の知る限りでは、帝国のキリスト教迫害の史料として挙げられているのはタキトゥス (Tacitus) とカプリニー (Pliny) などの教会外の人の手になったものである。これに対しわれわれがヨハネの黙示録を教会内の信徒による迫害資料として Kaiserkultus (皇帝礼拝) と Christuskultus (キリスト礼拝) との闘争の真因を探るのは不当であろうか。では皇帝礼拝とキリスト礼拝の真剋の真因とは何であろうか。筆者はこれをキリスト教会の信仰の自己主張に帰そうと試みるものである。

第一章 著作と執筆年代

ヨハネの黙示録がダニエル書とともにいわゆる黙示文学の系列に属することは既に述べた通りである。他の黙示文学はさておき、これらの両書の間には執筆の年代とその回覧の地域を異にしながらも迫害下にあるユダヤ教徒とキリスト教徒の不信を戒め、殉教精神を鼓吹する基調において相互に類似するものがある。だがこのような類似にもかかわらず、この二つには旧約と新約、ユダヤ教とキリスト教の区別による表現上の差異がはっきりとあらわれている。今ここにその著しい一つの差異を挙げれば、ダニエル書における黙示の発言者ダニエルとは実在の人物の名ではなく Pseudonym (匿名) である。これに反し小アジアの七つの教会へ神とキリストの黙示の伝達者と自己宣言をするヨハネとは匿名でなく歴史上の実在の人物であることは現代の注解者によって指摘されている。

Der Seher¹⁴⁾ Johannes verbirgt sich nicht unter dem Pseudonym, eines Frommen aus dem alten Bund, sondern er nennt seinen eigenen Namen, der den Gemeinden wohl bekannt ist.

私訳

霊覚者ヨハネスは旧約時代の一人の義人の偽名で本名を秘さないで、教会に知れわたっていた実名を名乗っている。

新約聖書の中にあらわれるヨハネの名はひとりに限られていない。この書の著名はしかし2世紀までは Justin とか Irenaeus などの apostolic¹¹⁾ Fathers によって、ゼベタイの子、十二使徒の一人いわゆるヨハネ福音書の著者と同一人物と信じられ伝えられていた。3世紀になって、この著者の霊感性の高さに打たれながらも、第四福音書の著者との同一性に疑問符を投げたのはアレキサンドリアの Dionysius であった。ここにおいて、この黙示録の真の著者が誰であるかが問題となる。これまでそれに該当する another John (もう一人のヨハネ) として挙げられて来たのは John the Elder (長老ヨハネ) である。長老ヨハネの名はヒエラポリスの Papias の口から先に述べた Irenaeus に伝えられ、その断片がニコメディアの監督 Eusebius の手になる最古の教会史 *ἱστορία Ἐκκλησιαστική* に収められている。これによれば、長老ヨハネについて知り得ることはその歴史的事実だけではなかろうか。

語法、文体、構想、信仰基調について福音書と黙示録との対比研究を行なって、両書の著者の性格を二つの類型、すなわち John the apostle (使徒ヨハネ) と John the Seer (先見者ヨハネ) とに区別したのは¹²⁾ Henry Charles である。福音書と黙示録とは著者問題をめぐって長い世紀にわたって論争され両者の差異が主張されるのに並行してその類似もまた明らかにされた。Charles は以上を総合した結果、両書の著者は同じ時代の同じ religious circle に属する別人としている。なお Charles によればゼベタイの子ヨハネは福音書と黙示録の著者該当の枠から外され、その authorship (著書の出所) を問われるのは先見者ヨハネと長老ヨハネに限られている。さらに彼は先見者ヨハネと長老ヨハネとの師弟関係を想定している。先見者ヨハネは彼の Image であり、長老ヨハネの実在を示唆するものは前述の Papias の所伝だけである。要するにヨハネの黙示録の著者が誰であるかについて史実的に確定することは不可能である。思うにこの著者はゼベタイの子ヨハネ、十二使徒の一人のヨハネの信仰の道統に与かる無名の、使徒に準じる小アジア教会を代表する貫禄的存在ではなかったらうか。

旧約聖書の中の預言文学の枠とされているのはイザヤ書である。この書が全章にわたり、イザヤの筆であるとされた時代はあった。がこの書66章は著者の生きた時代とは異った背景を含んでいる。このことからイザヤ書の40—55までを、人はイザヤとは別人とし、その人に第二イザヤの名をつけている。そして第二¹³⁾イザヤについて人は何も知らない。ヨハネの黙示録の著者も、第二イザヤのように教会史外の史料から確証を得られない。

再びダニエル書について、ダニエル書もまた迫害下にあるユダヤ教徒に殉教精神を鼓吹している。前に明らかにしたようにこの書の著者は匿名者である。彼がこのような匿名を用いたのは、恐らく著者が殉教者の死をさけ、その政治的¹⁴⁾軍事的効果を期した闘争の術知からではなかろうか。Charles も含め、この書の近代の注解者たちは、この書の執筆年代について教父たちの所説に批判を加えつつ、これをローマ皇帝 Domitian の治世としている。Domitian について記されているのは Suetonius Frangulus (75—140) の De Vita Caesarum (ローマ皇帝列伝) である。その中から黙示録に関係あるものをあげれば次のような記事がある。

彼は祭日に副署を臣下をさせて下の文を含む廻状を發布させた。

Dominus¹⁵⁾ et Deus noster hoc fieri iubet.

私訳

われらの主にして神にいます方がこれをなせと味じたもう。VIII—XIII

このような self deification (自己神化) は、ローマ皇帝への最大の尊称を Augustus (尊厳者) としたローマ市民である Suetonius にも肯んじられないところであった。まして monotheism (一神教) のユダヤ教に接木されたキリスト教徒の宗教的良心にはダニエル書の場合におけると同じように許しがたい瀆神行為であった。黙示録は繰返して言えばヨハネが実名を名乗り、エベソ、スミルナ、ベルガモ、テアテラ、サルデス、ヒラデルヒヤ、ラオデキヤの七つの教会に宛た使信である。

黙示録は文体と用語において特異なものがある。その数字は算用とは異質である。七とは sacred number (聖数完全数) である。七つの教会とは全教会を意味しているとは注解者たちが説明するところである。ローマ帝国治下の全教会は Domitian の時代までに信徒の数において、その相互の協力体制においてどれだけの成長を見せていたのであろうか。極めて大まかに言って、これは迫害の長い試練を経て自己防衛にぬかりがなかったダニエルの時代のそれには較べられなかったに違いない。ダニエルの時代は信徒を迫害から守るのは集団であったろう。ヨハネの時には、信徒の避難はどこに求められたらうか。

Μακάριοι οἱ νεκροὶ οἱ ἐν κυρίῳ ἀποθνήσκοντες (14.13) ἀπ' ἄρτι.

今から後、主にあつて死ぬ死人はさいわいである。

日本聖書協会訳

殉教の意味はダニエルとヨハネでは上の章句が示すように、献身の対象が民族と言う集団とイエス・キリストと言う個人に変わっている。ἐν κυρίῳ 主にあつてと言う phrase (句) は黙示録にあつては集団からの離脱また集団への絶望が含まれているのではなからうか。黙示録は宗教学である。これには史実が脚色されている。これは Domitian の迫害が Nero の暗号によって示唆されている。少しくこれを付言すれば、古代ローマ世界では今日のアラビア数字がなく、それを表わすには alphabet の一つ一つを用いた。従つて公表を憚る人名を数で呼んだ。

ここに、知恵が必要である。思慮のある者は獣の数字を解くがよい。その数字とは人間をさすものである。そして、その数字とは六百六十六である。13.18 日本聖書協会訳

この 666 に当るものがギリシャ語の Kaiser Nero¹⁾ であるとされるのは殆んど定説である。ダニエル書は Antiochos Epiphanes の迫害状況下において書かれた。しかしここに描き出される時代はバビロン王 Nebchadnezzar である。過去を現在に投影させるのもまた黙示文学の様式である。このゆえに、われわれが黙示録の成立年代を Domitian から Nero に溯らせる必要がないと思われる。

Nero の悪徳と悪業については Suetonius の外 Tacitus²⁾ も詳細に記している。殊に後者が記すところによれば、Nero は文字通りの気まぐれからローマに放火し市民の怨恨を避けるため、その責任を当時人類の敵として憎悪されていたクリスチャンに転嫁し、大虐殺を行なわせた。Nero は自殺した。彼の自殺にかつてなかつた尾鱈をつけた風評となった。すなわち、彼はどこかに身を隠し、Parthia に逃げ、東方の王となりエルサレムに王座を設けたなど、そればかりではない。彼が陰府から生き返つたと言う怪奇なロマンさえ生れた。しかもこのような奇々怪々な風聞³⁾ が弘められたところは Asia Minor 小アジアであった。この間の消息を反映させているところは黙示録の13章である。

第二章 世界と世界像

ヨハネの黙示録の記事は幻影である。幻影と言えば Dante の神曲もまたそれである。がダンテの神曲は黙示録のようにその内容の理解が難渋ではない。黙示録が難解であるのは、では、何によるのであろうか。その一つは本書に用いられる *mystical imagery* (神秘的比喻) のゆえからではなからうか。神曲にあらわれる人物は実名を与えられるのに反し、黙示録においては前章で示されたごとく数字を以て呼ばれている。これは、しかし言わば、氷山の一角である。確かに黙示録の記事は幻影である。にもかかわらず、著者が読者に訴えるもので幻影の視覚ではなくこの靈感である。

ο έχων ους ακουσάτω τὸ πνεῦμα λέγει ἐκκλησίαις.

耳ある者は、御霊が諸教会に言うことを聞くがよい。 2.17, 2.29, 3.6, 3.13, 3.22
日本聖書協会訳

上はヨハネがエベソの教会を筆頭とする七つの教会に宛てたメッセージの終わりを結ぶ挨拶である。われわれはこの挨拶に関連した七つの教会を含む小アジアの当時の精神的風土を一瞥しなければならない。このエベソに連る七つの教会が散在する地域はローマの *Proconsul* の治下にあった。ローマの治下にあるとは言いながら、この地方で語られたのはラテン語ではなく、ギリシア語であった。ここには別言すれば *hellenism* 文化が温存されていた。

一般に人はヘレニズムと言えば *Alexandria the Great* アレキサンダ大王がペルシア、エジプト、バビロンなどの史家の言う *Orient* 東方世界を征服した後のギリシア語を媒介とした文化統一とする。これに関し人はともすればヘレニズム文化とは西方文化の東方文化への一方的な克服または支配であると考えないであろうか。われわれはヘレニズム文化に絡んで東方から西方への挑戦に注目する必要がないであろうか。 *Hellenism* の語を造った *Droysen* の著書にもそのような意図が存していたのではなかったらうか。

キリスト教の誕生に対し、東方からの反撃としてあらわれたのは *Gnosticism*¹¹⁾ である。 *Gnosticism* には東方宗教からキリスト教への挑戦が見られると同時に、またこれにも東方精神から西方への反発が窺われないであろうか。筆を黙示録の幻影に戻そう。著者は何故にこのような神話的形象を用いたであろうか。神話的形象は黙示録の著者の創意によるものではない。それは既に東方思想の表現用具として著者に供せられていた。

*Oriental*¹²⁾ *thought had been non-conceptual, conveyed in images and symbols, rather disguising its ultimate object in myths and rites than expounding them logically.*

私訳

東方の思想は形象や象徴で伝えられ、どちらかと言えば究極の事を論理的に解明せず
に神話や祭儀で表現する非理性的なものである。

黙示録の著者がアジアにある七つの教会と殊にアジアにある二字を付加したのは、アジアの精神風土として非¹³⁾キリスト教的なものを予想し、この精算を意図した結果であつたらう。そのために彼はヘレニズム的世界をそのまま描き、その後これをキリスト教的世界に改造しようとする逆説的な戦闘を企てたのではなからうか。 *Hans Jonas* は *hellenism* 文化を *Alexander* 以前と以後、後期と *Byzanz* の四時代に区分している。

これらの四つの中後期 *hellenism* 時代にはこれまでの文化は哲学的性格を脱し宗教的性格に変質した。これには東方的なものがギリシア的なものに優先していた。 *gnosticism*

とは、言わば、後期 hellenism 文化の結実と言っても差支ないだろう。では gnosticism の宗教的な性格は何であろうか。それはユダヤ教のような monotheism (一神教)でなく、また仏教のような pantheism (汎神論)でもなく、雑多の要素が混在する syncretism (混合宗教)である。gnosis はギリシア語、これは知識の意味、そしてこの知識を求めることがこの宗教の眼目であるところを見ればこれが影響されているのはギリシア思想である。他面これに Adam の名が出てくるので、これがユダヤ人の経典旧約聖書に係わりがある。その他ゲノーシスに混在するのはペルシアの Duálism (二元論)やバビロンの astrology (占星術)である。

黙示録を構成するものも上記のバビロンの占星術、ペルシアの二元論とユダヤの一神教などである。これには日と月が¹¹⁾神の栄光の星が世の光としての教会の象徴とされ、またそれが天使の名をつけられているところがある。星辰を歌わしく歌ったのは詩篇19である。

The heavens declare the Glory of God; and firmament sheweth his handy work.
19.1 A.V

黙示録には上掲の詩句の情景を裏切るものがある。

and there was war in heaven: Michael and his angels fought against the dragon: and the dragon fought and his angels, 12.7 A.V

これは黙示録の断面図である。黙示録は天地万物の調和と総合の構図としての曼陀羅(まんだら)とは正に対蹠的である。それはたとえば一幅の戦闘のドラマである。この舞台には神の国と地の国とはそれぞれ上下に従属し相互に連係する二つの群として、すなわち、小羊(キリスト)・太陽を着た女(教会)・聖徒の一陣と龍(サタン)・獣(ローマ皇帝・バビロン(ローマ帝国)・偽予言者の他陣とが闘争している。

このような二元対立もまた著者の創作ではない。φῶς と σκοτία との対比が著しいのはヨハネによる福音書とヨハネの第一の手紙、クムラン文書、さらに溯ればペルシアの Zoroaster にその萌芽は見出される。彼が一切の善と光明の根源を Aharmazda¹²⁾に、悪と暗黒とのそれをば Ariman に帰したことは殆ど常識になっている。Aharmazda と Ariman との対立と相克に対応する現実は、でも、何であろうか。それは自然現象と人生経験ではなかったらうか。

黙示録における二元世界の対立は、しかし、自然界においてではなく、人生の中でもなく、人類の歴史の内とそれを貫いてである。この戦において、勝利はいずれの側か。そして勝敗の決着の日が来るのはいつか。

And I heard a loud voice saying in heaven, Now is come salvation, and strength, and kingdom of God and the power of his Christ. 13.10 A.V

これは読んで明らかなように幻影である。著者は幻影をそのまま伝達しない。彼が幻影を総合し、これを反省し、観照して発信する主意は次の語に簡約されている。

Ὁ γὰρ καιρὸς ἐγγύς.

For the time is at hand. 1.4

これは sub specie eternitatis 氷遠の相において思考された未来でない。それは破局に直面し Hic et nunc ここで即座の決断を迫まる将来である。

第三章 皇帝礼拝とキリスト礼拝

龍は天使ミカエルとの戦に敗れ地に落ちた。ここにおいて天使は完全にキリストの統治に服した。

and I stood upon the sand of the sea and saw a beast rise up out of the sea, having seven heads and ten horns, and upon his horns ten crowns and upon his heads the name of blasphemy. 13.1 A.V

龍はこの異形な獣を従属し、地において天の神と小羊に挑戦する。龍に従属したこの獣だけでない。そしてこれらの獣によって象徴されるものはローマの七人の皇帝であることは次のように説明されている。

and there are seven kings: five are fallen, and one is, and the other is not yet come; and when he cometh, he must continue a short time 17.10 A.V

七人の王とは誰であるか。それについて Bousset は Nero の後の Galba, Cetho, Vitellius, Vespasian, Titus と Domitian の七人を指名する。これには、しかし反論がある。われわれは、言わずもがなのことながら黙示録の著者に近代史学的な意味での史実の精確さを期待することが出来ない、他面この書に使用される数字に、先に触れたように近代的算数を読み入れてはならない。粗澁な結論ではあるが、要するにこの七人の王 Nero に前後する皇帝礼拝を強制した皇帝たちであり、著者はこの七人の指摘によって時代への呼応を示唆しているのではなかろうか。重ねて、著者はこの書の巻頭において“時は近い”と宣言する。彼は一面これを黙示文学様式に従って

Therefore rejoyce, ye heavens, and ye that dwelleth in them. Woe to the inhabitants of the earth and of the sea; for the devil is come down unto you, having great wrath, because *he knoweth that he hath but a short time.* 12.11 A.V

悪魔は地に来た。天使はそれに追跡の手をゆるめない。悪魔は正しく断末の魔となる。両軍の対決の時の砲煙弾雨のように、黙示録の著者は天災地異の calamity の地獄絵を展開させる。神の国（神—キリスト—聖徒）と地の国（サタン—皇帝—偽預言者）との闘争は局地から全地への戦争となる。著者はこれを Harmagedon¹¹⁾と呼んでいる。ここで Calamity は Catastrophe へと激変し獣とそれを拝する者たちは硫黄の燃える火の池に投げ入れられる。ナザレのイエスを始め使徒たちの言葉や文の中に神と悪魔の闘争¹²⁾について言及しているところがある。黙示録の著者における悪魔の規定には以上の聖徒に、見られない特異なものがないであろうか。イエスを荒野で誘惑した悪魔は行動するが、その実体は不明である。パウロの場合もそうである。それでは、黙示録には悪魔の性格はどのように具体化されているであろうか。この答には上述の内容を要約すれば事足りるのではなかろうか。別言すれば悪魔とは獣の名で呼ばれるローマ皇帝とバビロンの隠喩で描かれているローマ帝国である。このことをさらに明らかにするため、はじめの項で紹介したローマへの手紙と、マタイによる福音書からそれぞれ一節を引用しその対比に備えたい。

Let every person be subject to the governing authorities. For there is no authority except from God, and those that have been instituted by God. 13.1 R.S.V

“Render therefore to Caesar the things that are Caesar’s, and to God that are god’s.” 22.21 R.S.V

一は国家権力の存在理由を神によって意義づけ、他はイエスの国家権力への調停と見なされる。このような国家権力への調停またその存在の理由づけは、しかし黙示録の中には見出されない。黙示録は神の座¹³⁾について荘厳なそして美麗な描写を試みている。この書にはこれと並行してキリストへの eulogia (賛美) が多くのところに掲げられている。先

ず eulogia の一つを挙げよう。

The kingdoms of this world are become the kingdoms of our Lord, and of his Christ; and he shall reign for ever and ever. 11.15 A.V

われわれは上に掲げた一節の中に下の如く connotation (言外の意味) と irony (反語法) を読み取らねばならない。

The kingdoms of this world are *not* become the kingdom of *their* Lord, *Satan*, and his *subject*, *Nero*; and he shall be punished for ever and ever.

こうした connotation と irony とは神の座の荘麗な描出にも見出されねばならない。

大河が湖に注ぐようにローマに東方から Isis, Adonis, Mithra などの mystery religion (密儀宗教) が伝来した。これらの宗教は儀式と教義との面において決して低級なものではなかった。われわれ¹¹⁾はキリスト教だけがローマに伝来した宗教と断定してはならない。ローマがこのような宗教の統一策として打出したのは政治的一神教としての Emperor worship (皇帝礼拝) であった。これは人々に内面的回心を迫らなかつた。これが人に求めたのは外面的服従であった。これは諸宗教には寛容とされた。多くの密儀宗教の徒とは全く異り、キリスト教徒を皇帝礼拝の背後にあるものの過程を溯源し、天地創造以来、対立し闘争したキリストとサタンの終末な対決を石取した。Eschatology (終末論) の内容にはこれも含まれているのではなからうか。

Tacitus が Germania を著わしてローマの衰亡を警告したのは黙示録が書かれた時代とほぼ一致している。Germania がローマの滅亡を同胞に警化したのに反し、黙示録はローマの審判を同信に宣言した。ローマは滅んだ。しかし、キリストの Parousia (再臨) は実現しなかつた。そのゆえに、黙示録は一代のベストセラーになり終らなかつた。人が個人に内在する原罪に目覚め、これからの救いに取組んだ時、彼らに強く追つたのはローマ人への手紙であった。他面歴史に伏在する時代悪が人心を暗くし未来への疑惑を幕らせた時、この要望に応えたのはヨハネの黙示録であった。別言すれば前者は Soteriology (救済論) の後者は eschatology (終末論) のそれぞれ指道原理となった。

む す び

筆者はこれまでの論述において先ずヨハネの黙示録の正経としての聖書における地位をローマ人への手紙と対比して明らかにし、その著者の authorship に触れその歴史的実在性と時代状況の一端に触れ、さらにこの書がものされた精神的風土を描こうと試みた。最後に筆者はこの宗教文学に歴史的考察を加え、キリスト教徒の皇帝礼拝の絶対拒否をこの書の重要なテーマであると結論したのである。

ヨーロッパ史においては教会 (kirche, church) は単なる宗教団体ではなく、それは国家 (Staat, state) と対立する社会である。教会と国家との対立と並立の緊張はヨーロッパ史の主潮であり、アジア史には見られぬ事象である。第一次大戦以来、ヨーロッパの教会と世界との関係は第一世紀の小アジア教会とローマ帝国のそれに相通うものがある。とは言え、ヨーロッパでは国家権力が個人の民心に介入することに抵抗し続けている。

他面大戦後 Albert¹²⁾ Schweitzer のイエス伝研究の発表を契機に Eschatology への関心がキリスト教徒の心を捉えまた Karl¹³⁾ Barth たちの危機神学者たちの弁証神学が成立するに及んで、キリスト教会側からヨーロッパの近代の人間中心文化への批判が起こり、その克服が意図されている。そして Endgeschichtlich (終末史) の世界史観が Ernst Troeltsch の Entwicklung (発展史) 史観、Karl marx や Friedrich Engels

の materialistisch (唯物史) 史観また古代ギリシアの Cosmology に由来する circular (回帰) 史観に対立する主潮となっていることはわれわれの注目に値するところではなからうか。

注

1. Präludien von Windelland (1924), p. 1.
2. 新約聖書の本文 (1973) 参照. B.M メツガー著 橋本滋男訳.
3. Augustine: Confessiones with an English translation by Willicm Watts Harvard university Press, VIII-XII p. 465.
4. ハンス・リルエ著 間垣洋助訳 ヨハネ黙示録. p. 17.
5. Roland Bainton: Here I stand Abingdon Press, p. 129.
6. Max Dvorak: Kunstgeschichte als Geistesgeschichte.
中村茂夫訳 精神史としての美術史. p. 298.
7. Dana and Mantey: Manual Grammar of the Greek New Testament. p. 13.
8. The century Bible Revelation, p. 13.
9. The Interpreter's Dictionary of the Bible, vol. 1 p. 761 ff.
10. 黒崎幸吉著 注解新約聖書 ヨハネ黙示録. p. 3.
11. Das neue Testament Deutsch 11. p. 3.
12. ドイツ語 Kirhcenväter. 日本語教父.
古代教会の著者のうち、教会によって使徒的信仰の継承者と見なされたものの敬称.
13. 彼の注解書は International critical Commentary に二巻となって加えられている.
14. 中沢治樹著 第二イザヤ研究 (164) 参照.
15. マカベアの反抗が起こったのはダニエル書が書かれた時と前後している.
16. 黙示録著者にはこれが神を汚す冒瀆である.
17. The International Critical Commentary Revelation, vol. 1 p. 366 ff
18. Annals with English translation by John Jackson XV-Liv. p. 288.
19. The Century Bible Revelation. p. 56 ff
20. The Translator's New Testament. p. 566 ff.
21. Hans Jonas: The gnostic religion. p. 21.
22. The Revelation. 2.6, 2.13-14, 2.20, 3.9.
23. The Revelation. 1.16, 12, 1.
24. Breasted: Ancient times, A history of the world. p. 198.
25. The Revelation. 16,16
26. Mt. 4.1-11 Mk. 1.12-13 Lk. 4.1-13.
27. The Revelation. 4.2-3, 5.1, 7.15, 10.16, 20.15-21.
28. J. Grescham Machen: The Origin of Paul's Religion (1970). p. 227 ff.
29. Albert Schweitzer: Von Reimarus zu Wrede.
Eine Geschichte der Leben-Jesus-Forschung. 初版 1906.
30. Karl Barth: Der Römerbrief. 初版 1918.
(原典)
Eberhard Nestle: Novum Testamentum Graece (1169).
Kurt Aland, Mathew Black,: The Greek New Testament (1968).
(外国語訳)
The Bible Authoried Version.

The Bible Revised Standard Version.

The New English Bible.

Die Bibel or die ganze Heilige Schrift nach der Delutschen Übersetzung, D. Martin Luthers.

Das neue Testament Übersetzt von Ludwig Albrecht.

Summary

The Revelation of St. John has been investigated from many sides by many people. In this paper the writer, not from dogmatical judgment, but from historical survey, has tried to make it his conclusion that the struggle between Emperor worship and Christ worship is the ultimate end of the conflict between God and Satan since the creation of the world, in the Revelation of St. John.